

---

# 優しいぬくもり

洗井 あい

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

優しいぬくもり

### 【Nコード】

N2499A

### 【作者名】

洗井 あい

### 【あらすじ】

他人の彼女に手を出して、こっぴどくシメられたオレ。そんな馬鹿なオレを助けてくれたのは、良くも悪くも田辺兄弟とその父親だった。

## 1（前書き）

「ボクは夢をみる」番外編「喧嘩上等ッス」

頭がガンガンする。

「病院にいかなきゃダメ?」、こんな痛みぐらいで気弱になって馬鹿みたいだ。

口の中はサビた鉄の味がして、舌を動かしたら傷口から血が流れ出た。

身体中がギシギシと痛んで、顔を上げるのもままならない・・・

「・・・クッ」

薄汚れたコンクリートの上にぶっ倒れている無様な自分の姿、なんでこんな目に?

「しかたないだろ、ヒトの女に手を出したんだから」そりゃそうだ・・・  
・ 相手が悪かったと反省中。

地べたに顔を押し付けられたまま、引きずられて、まさにボロ雑巾  
って感じ?

もしかしたら、少年Aにしちゃうかもな・・・コイツのこと。  
急に可笑しくなって、笑いを必死で押し殺している自分に気が付いた。

「テメー、何笑ってんだ!頭おかしいんか!!」

「グフッ」

腹を思いっきり蹴られた衝撃に、口の中に溜まっていた血を噴出す。  
自分の吐き出した血液が、顔にヌルリとくっついて気持ち悪いな・・・

・  
彼女を寝取ったくらいで、尋常じゃないよ、まったく。

自分が非力なのはしかたないとしても、正々堂々と相手にならなくたって良かったのに・・・

オレって、ホントのお馬鹿さんってね。

「馬鹿な奴、マサシさんの彼女に手え出すなんてなあ」

「ホント、どーなるかフツーはわかるよなあ」

オレ、フツーじゃないからわかんない。

オレとマサシとかいゆー高校生を取り囲んでいる奴らの靴が、僅かに視界にはいるだけ。

きつと目とかスゲー腫れてるんだろうな・・・重くて開かないもん。ほとんど感覚のない腕で、血溜まりから逃れようと仰向けに身体を転がした。

「うえ、サイアク」

「マジヤバクね？」

そんなにスゲーんだ。

何がなんだかわかんねー、あー、喉渴いたなあ・・・

身体中が物凄い悲鳴をあげてオレを襲っているってのに

まったく恐怖を感じないのは、オレが元から現実逃避してるからかもしれない。

「キレイな顔してからって、調子のもてんじゃねーぞ、コラ！」

「マサシさん！！」

蹴られるのを覚悟して身構えていたけれど、身体に激痛は走らない。なんで？

顔のすぐ横でバタバタしないでくれる？うつとうしいっていうかいつ踏みつけられるかって、気がきじゃないんだから。

「もう止めてよ、これ以上やったらマジで死ぬって」

「うるせー田辺、やらせる！」

「もう十分だよ、コイツだつてわかつてるよ」

「・・・チツ！テメー、今度ミホに近づいたら本気でぶっ潰すぞ」

いや・・・もうかなり本気でぶっ潰されてるのに、これ以上ってアルんだ。

親切な誰かさんのお陰で命拾ひしたって？お節介なヤツもいるんだな・・・

意識が少しずつ途切れ始めているのがわかる、頭の上でゴチャゴチャとした話し声。

次に気が付くと、奴らの気配は無くなっていた。

このまま死んだりして・・・出血多量？それか窒息死かも・・・さつき仰向けになったせいで上手く息が出来ない・・・苦しいな・・・コレ・・・

ゴホゴホッと咳き込んだ拍子に、激痛が全身を走り抜け、オレを心地良い世界にいざなっていた。

水・・・水が飲みたい・・・口の中の血なまぐさい匂いに吐き気を覚えながら目覚めると、

見知らぬ奴が傍らで呆けたように眠っていた。

悪ぶって抜いたような茶髪の髪の毛と、あどけない寝顔が似合わないくて思わず笑ってしまった。

コイツがオレを助けたのかな・・・テキトウに貼られた絆創膏の下から、

未だに出血している血液が滲んでいる・・・ヤルならちゃんとヤレての、テキトウ過ぎ。

流れた血が乾いて頬が強張っていた。

軋む身体をゆっくりと起こすと、激しい痛みがわき腹と頭に襲い掛かってくる。

「ふう・・・」アバラ・・・いつてるかもな・・・腕も脚も折れてはいないようだけど、それでもひどく痛んだ。

革張りのソファーには、オレから流れた血が乾いて固まっている。

身体中が熱をもってジクジクと疼いていたけれど、いつまでもココに居る訳にはいかないな。

助けてくれたのは有難いけど、あのまま放って置いてくれたら良かったに・・・

お節介な馬鹿の、暢気な寝顔に反吐が出る。

「くう・・・」激痛で気が狂いそうになりながら、テーブルに手をつけて立ち上がるうとしたけれど

平衡感覚を失って床の上に四つん這いに手をついた・・・チキシヨ

ウ、動けっの・・・  
ポタリと垂れた血の滴に、少し気が遠のいた気がした。  
早く、行こう・・・

這いつくばるような無様な格好で玄関までたどり着き、おぼつかない脚を靴に滑らせたその時、  
ガチャリと音を立ててドアの鍵が回った・・・ヤベえ、誰か帰ってきた・・・  
ありったけの力を振り絞って立ち上がったけれど、グルグルと視界が回り始めた。

ユラユラと揺れているのが自分なのか、周りの景色なのかわからないまま

・ オレの視界に入ってきた男の驚愕した顔・・・笑えるかも、コレ・・・

「おい！」

グラリ・・・歪む、世界が歪んでいく・・・  
パタンと音を立て、オレの全てが闇に閉ざされた。

喉が・・・水、水、水・・・  
カラカラに乾いて張り付いた唇に、やさしい甘い水滴が落ちてくる。  
もつと・・・もつと水・・・頂戴・・・、陸に打ち上げられた魚のように喘いだ口の中に滴り落ちる甘い水。

「んああ・・・」声にならない声で、渴きを癒すその水を貪る・・・

「・・・もつと」、困ったように微笑んだ男は、傍らのペットボトルの水を己の口に含むと  
躊躇することなく、オレの濡れた口に流し込んでくれた・・・生き



てる、オレ・・・  
柔らかな男の唇の感触にうっとりとしながら、口移しに流れこむ水の甘さに酔った。

「もう、いいかな？あとで水差しを持ってこさせるから」

僅かばかりに頷いて、肺の中の腐った息を吐き出した。  
大きく息を吸った途端、激しい痛みがわき腹を襲った。

「くっとう・・・」

「アバラが3本ばかり折れているからね、しばらくジッとしていなさい」

腕に繋がれた点滴と、身体に巻かれた包帯の匂い・・・白い天井・・・

ベッドの上に寝ているオレは、病院へ担ぎ込まれたらしいけど。  
コイツ、誰？医者か？

「キミは、リョウの友だちかな？」

「だれ？」

「私の弟の田辺リョウの友だち？」

「しりません」

不可解そうな顔をして、その男は腕を組んだ。

ベッドの脇のイスに腰を下ろして、首から聴診器を提げてはいたけれど、

白衣なんて着ていなかった・・・それより、医者には見えなくらい・・・素敵。

「んー、キミはウチの玄関先で倒れたんだけど、覚えてない？」

「・・・あ」

こいつ、あのお節介やローの兄貴なんだ・・・オレの最後の記憶・・・  
・  
アイツの家にいて、帰ろうって思って靴を履いて・・・そこで、コ  
ト切れたんだ。

その人はどんな事を思いながら、オレに話しかけているのかな？  
医師独特のひょうひょうとした口調に不安になる。

「私が帰宅してドアを開けたら血だらけのキミがいたんだからね、  
驚いたよ。」

そのまま意識を失って倒れてしまったから、慌てて病院に引き返して  
きたんだけどね」

「・・・」

「リヨウの友だちじゃないのかい？」

「違います。シメられたのを助けてくれたみたいで・・・覚えてない  
んですけど」

「誰にやられたの？」

「・・・」

「女の子がこんな事をされるなんて、医師としては警察に通報する  
義務があるんだ」

「・・・」

「誰にやられたの？」

「ご家族にご迷惑が掛かりますから」

「リヨウにもやられた？」

「彼には何も」

医師は大きなため息をついて、考え込むように目をつぶった。

その端整な顔立ちと優雅な気品に、瞼の腫れで視野の狭いオレの目  
が吸い寄せられていた。

キレイなヒト・・・地位も名誉も、女も自由に手に入れられる男に

惹かれている自分がいた。

「とにかく、最低でも顔の腫れがひくまでは、入院してもらおうよ。」

明日は、朝から脳の検査と内臓の検査をします、食事は摂らないように」

「あの」

部屋を立ち去ろうと立ち上がった男は、医師の顔でオレを見下ろした。

「なに？」

「弟さんとは関わりたくないんで、このこと黙っててもらえますか？」

「わかりました」

「それと・・・ありがとうございます・・・色々と」

肩眉を吊り上げて見せると、口元だけで微笑んでみせビニール袋に入れられた、血生臭い衣服を手にとって言った。

「コレ、洗濯に出しておくからね。」

「あ・・・すみません」

「もう、寝なさい。痛み止めが切れたら、もっと痛くなるよ」

彼は、外されていた氷嚢を頭の上に乗せ直した。

その時、氷嚢から滴り落ちた水滴が目尻にポトリと流れ落ち言う事をきこうとしない身体に、その冷ややかな感覚が伝わって身震いした。

「もう一度、水、飲んでおく？」

オレは、彼の言葉に黙って頷いた。

再び重ねられた唇から流れ落ちる水は、砂漠に落ちる水のようにあつという間に消えてなくなる。

意地汚く彼の口の中に滑り込んでいった自分の舌先が、執拗に彼の舌を絡めとっている・・・

オレ、なに欲情してんだろう・・・こんな時に・・・唇の痛みも忘れ、甘い蜜を舐めた。

彼の驚いたような顔と共に吐き出された、甘い吐息に満足して、オレはそつと舌を抜く。

こんな現実味のない出来事が実際に起こるなんてな、トンでるのか？すごい顔してるのに、口の中は血生臭いはずなのにね・・・  
笑える、地獄の後に天使発見かよ、ツイてるかも、オレ。

「まだ若いのに、キスが上手いね。忘れられなくなりそうだよ」

「おやすみなさい」

「おやすみ」

彼はすぐさま医師の顔を取り戻し、くるりと背を向けて部屋を出て行った。

満たされた気持ちで頬が緩む・・・アタタ、顔じゅう痛えー・・・  
病院の寝巻きのカッチリとした肌触りが

ザワザワと肌を撫でて不快だったけれど、ぶっ飛ばされてこんなに身体はボロボロだったけれど、

なんだか妙にハッピーな気分なのが不思議。

ナチュラルハイ？それともこの点滴のせいかな、ぶん殴られて脳みそバーンって感じかも？

白衣？の天使の心地よいキスを思い出しながら、オレは重い瞼を閉

じ  
た。

ズキン、ズキンと、容赦なく身体に杭を打ち込まれるような痛みで目が覚める。

くそつ、痛み止めが切れた、くう、コレって痛すぎい・・・激しすぎる痛みには仰け反ってしまう。

手が握ったベッドの柵が、ガチャガチャと大きな音を立てる。

真つ暗な病室の異様な気配に気が付いてか、若い看護師が慌てて走ってきた。

「どうしました？」

「つう・・・」

聞くなよ、訴えようにも、こんなんじゃ・・・ムリ・・・「くつう」・・・額に冷たい汗が流れる。

柵を固く握った手は、徐々に血の気が失せていく・・・痛てえー

「一応、先生、呼びますね・・・待っててね」

待っててねって、何処にも行けないってのー、身体の不自由さと痛みとで朦朧となりながら

意識失った方が、絶対、ラクになれるよなーなんて・・・イテテ、イッテ・・・

バタバタと看護師の廊下を走る足音が遠のいて行く、ナースステーションでは

他の病室からもお呼びが掛かってるみたいだ。

枕に顔を埋め、息を殺して痛みを我慢していた。

突然、カチャカチャッと医療器具の音がしたかと思うと、腕にアル

コール綿が触れた。

「動かないで」

中年の男の声がした。

「MRI は、したのか？」

「明日の朝の予定で・・・」

「まったく、ジュンのやることは・・・今から連れて行きなさい」

痛みに冷や汗を流しながら、僅かばかりに見えた

医者顔を睨み付けた・・・

「ん？そんな元気があるなら、このくらい我慢しなさい」

我慢しろって・・・ヤブ医者かよ、こいつ・・・あの人に似た医師は言う。

ベッドサイドの明かりに照らされた顔は、無表情で厳しい雰囲気、近寄りがたい印象だった。

「田辺先生がいらしてくれて、助かりました」

「ジュンはどうしたんだ、当直じゃないのか？」

「はぁ・・・そうなんですが・・・ちよつと外出しております」

検査の間中、その医師は片時も傍を離れなかった。

救急救命へ運ばれてきた患者とすれ違うように検査室を移動して、その間中ずっと。

よっぱどヒマな先生なんだな・・・

薬が効いてきて、スーッと痛みが引いていったと同時に、強烈な眠気も襲ってきていた。



身体がフワリと浮いて、ベッドに寝かされた時には、目なんて開けてられなくて

枕元の話し声が、子守唄のように耳に流れていた。

「まだ、子供じゃないか・・・なんなんだ、コレは」

「ジュン先生がお連れになって、大袈裟に騒ぐなおっしやいまして」

「すぐにジュンを呼びなさい」

慌てたようにガタガタと開かれた扉、看護士のパタパタと走る足音。そして、呆れたようなため息が聞こえる。ややおいて、腫れた瞼に冷たいタオルが押し付けられた。

「身体は、大事に扱いなさい」

父親と変わらない年齢に見えるその男の言葉に、何故だか素直にオレは頷いていた。

「少し頭の中が腫れてるんだけど・・・数日安静にしていれば手術しなくても大丈夫だからね

明日、話をしよう。薬は朝まで効いてるはずだから、安心して眠りなさい・・・」

彼の低い穏やかな声に安堵しながら、オレの身体も心も久しぶりに深い眠りに落ちていった。

翌日の早朝、10歳も年の違う従兄弟が不機嫌な顔で病室の扉を開けた。

誰だか見分けがつかないくらい腫れあがったオレの顔を見るなり、皆から冷たいと言われる瞳に涙を浮かべ、掛ける言葉を失っていた。

「おはよー、ゴメンねタカ兄呼び出しちゃって」

「なんだよ、その顔・・・」

怯えた様な足取りで、オレに距離を置いてベッドの脇に立ち尽くす。そりゃそうだよな、こんなだもん・・・オレだって、スゲーシヨックなんですからね

元に戻るのかって心配かも・・・

「脳みそが腫れてるから、安静にしてなきゃダメなんだって。

おじいさんとおばあさんにバレちゃった？」

「いや・・・大丈夫、言ってない。友達と卒業旅行に行ってたって言うておいたよ。」

ホラ、マンションから着替え持って来たぞ」

「ありがとう」

オレの元気そうな声に安心したのか、タカ兄はドスッとパイプイスに腰を下ろすと

横になって点滴を受けているオレの顔をマジマジと覗き込んで、露骨に嫌な顔をする。

あんたも、医者だろがー！と、突っ込みたくなっただけど、歯科医だもんな、慣れてないか。

「誰にやられた？」

「んー、マサシとかいうヤツ。女に手出ししたからなんだけどねー」

「またかよ、いい加減にしろよ。子供のクセにヤルことだけは一人前なんだから」

後見人の祖父母に連絡するには忍びなくて、母の兄の息子、従兄弟のタカ兄に連絡してもらった。

タカ兄は、先週からオレが一人で住み始めたマンションに行って、電話で看護士に指示された身の回りのモノを見繕って持ってきてくれたのだけど・・・

オレの変わり果てた姿に、ショックを受けている事は確か。

だよなー、タカ兄のお気に入りのお人形さんがこんな姿にされちゃーなー。

「ゴメンね、タカ兄、忙しいのに・・・」

「・・・痛いかな？」

「少し」

タカ兄は、震えた手で・・・そつと腫れ上がった唇を撫でた。

ジクジクと疼く顔、大きく息をする度に、横腹をさす痛み、

頭はズンと重くて鈍い痛みが止まることなく続いていたけれど、我慢できないほどじゃない。

「可愛い顔が台無しだな」

「アハハ、タカ兄のお気に入りなのにな」

「もっと自分を大事にしろ、でないと心配で仕方ない」

「・・・」

わかってるよ、わかってる・・・でも、オレ・・・生きてるって実感が無いんだ。

こうやって追い込まれたって、痛くて痛くて気が狂いそうになたつて、生きてる気がしない。

オレの時間は数年前から止まってしまつて・・・目の前で二人が逝つてしまつたから。

そして、オレ自身の中に発見した、他人とは違つ自分の感覚をどうしていいかわからない。

「ミナミ、大丈夫か？」

「うん、ゴメンね、ゴメン・・・タカ兄」

「いいから・・・帰りにまた寄るから、買つてきて欲しいものあるか？」

「んー、今のトコはないかな。あんまり食べられないし」

「そっか、じゃあ行くよ」

タカ兄が立ち上がったと同時に、病室のドアがノックされ、白衣を身にまとつたアノ人が姿を現した。タカ兄と医師が互いの顔を見つめあふなり・・・ニヤリと笑つて歩み寄る。

「何してる、タカユキ？」

「アレ、ジュンさんが担当ですか？」

「いや、担当は親父なんだけどね」

「外科部長自ら担当してくれるんですか？それなら安心してお願いできる、後で挨拶に行きますね」

「彼女、オマエの何？女？」

「従姉妹なんです。今はあんなだけど、とてもキレイな子なんです」  
「よ」

「ああ、そうだろうな・・・」

アララ、どうやらこの二人、繋がっていたんだ。

昨夜の甘いキスの余韻が舌の上に甦って、身体の奥で僅かな欲望が疼いた。

「ミナミ、サークルの先輩で田辺ジュン先生、優秀な外科医だよ」

「夕べはご迷惑お掛けしました」

「少しは元気になったようで良かった、私はキミの担当じゃないけど・・・」

外科部長が付いたから安心して。後輩の従姉妹とあれば話は別だし、最後まで面倒みさせてもらいます」

「ジュンさん、どうしてオジサンが担当に？」

「さあね、親父の気まぐれみたいだよ」

意味深げにオレに笑みを投げかけた、彼の真意はわからなかった。

昨夜はあんなに素敵に見えた男の姿が、明るい日の光りの下では色あせて見えるのは何でかな。

カッチリと固められた髪と、真面目さを装うかのように掛けられたメガネの違和感。

白衣という鎧を身に付けて、彼は・・・自身を守っているのかもしれない。

「じゃあ、ジュンさん、宜しく願いします」

「了解」

タカ兄は、先輩医師に出会って安心したようだ。

明らかに来た時とは変わって朗らかに笑うと、手を振って病室のドアを閉める。

個室に残された医師とオレの間に、少しばかりバツが悪い空気が流れていた。

先に口を開いたのは、ジュン先生。

「そうなんだ、タカユキの従姉妹だったんだ」

「はあ」

「少し診察しようね」

彼はオレの手首を取って、脈診を始める。

近くに寄った彼の白衣から、女物の香水の匂いが微かに漂った。

なるほどね・・・そういう類か・・・と、この大人の男に引かれた理由にも合点してしまう。

見上げた彼の端整な顔のつくりにつつとりとしながら、この先に必ず重なるであろう

身体の温もりとその重みを想像する。

カッチリと固められた髪が、アンバランス過ぎて吹き出しそうになっているのを、

甘く涼やかな目元が咎めるように睨み付けた。

「なんですか？」

「ワザとらしくて、面白い」

「コレ？」

と、髪の毛を指差す。

「メガネまで・・・そこまでする必要あるの？」

「モテすぎちゃうからね」

メガネを外し胸のポケットにしまうと、ニッコリと微笑んで聴診器を掛けた。

必要以上に大きく胸元を開いて・・・オレの胸を値踏みするかのように、じいっと舐めるように見つめている。

「なにか・・・傷になってます?」

「・・・どう、コレ、痛い?」

右手で聴診器を胸に当て、左の3本の指の腹で、円を描くかのように乳房を撫でる。

ゾクゾクっ首筋を走った感覚に小さく呻いてしまったから、彼は調子付いたに違いない。

その指先が、立ち上がった乳首にも触れ始める。

「ん、・・・先生」

「早く治してしまいなさい、そうしたらもつと気持ち良くしてあげられるんだからね」

興奮したせいか、頭がズキンと痛み始めていた。

安静にしてなきゃいけないのに、こんなんじゃないか死んじゃうかも?

「頭、痛い・・・」

「ゴメンよ、興奮させちゃったからね。」

寝巻きの胸元を丁寧に閉じると、彼は無垢な首筋に口づけした。

「タカユキがよく話していたのを思い出したよ、お人形さんみたいに可愛い従姉妹がいるって。

目に入れても痛くない宝物で、その子が頼むなら何だってしてあげるってノロケてたっけ。」

「あのバカ・・・」

「アハハ、でもキミは想像していたより、ずっと面白い子みたいだね」

「意外性が売りだから」

「なるほど、楽しみだよ」

そうやって二人で話していると、唐突にドアが開け放たれた。

「ジュン・・・やっと現れたか・・・後で私の部屋に來なさい」

「ハイハイ、じゃあ、外科部長にちゃんと診てもらってね」

厳しい表情で立つ、中年医師のオーラの大きさに氣後れしてしまう。コソコソと逃げるように病室を出て行ったジュン先生とは対照的に、彼は堂々とベッドへと歩み寄った。



若い医師に向けられた険しい表情を崩すように、彼は優しく微笑んだ。

その包容力に捕らえられたオレは、ぼんやりと、ただ彼を見上げていた。

「どうかな」

「少し、頭が痛い。」

「話をしている疲れたんだろうね、静かにしていなさい」

「タベは、ずっと傍に居てくれたんですか？」

「キミの状態が落ち着くまで、モニターを睨んでいただけだよ」

何度か目が覚めたその時、視界に端に入る白衣の姿。

額の上に置かれたタオルは冷たいまま、何度も裏返して顔の熱を奪っていつてくれる。

エライ先生がこんなことまでするんだ・・・不思議と彼が傍に居てくれた事が嬉しかった。

「それで、都築ミナミさん・・・15歳っていうことは・・・」

「4月から高校生です」

「高校はどちらに？」

「T大附属高校に」

「奇遇だね、ウチの末の息子も同じ高校だよ、キミは何科？」

「特進に・・・」

「優秀なんだね、あそこの特進はイイからね、頑張りなさい。」

ウチの息子にも、キミのように上昇志向があるといいんだけど、周りに流される傾向があるんだよ。」

愚痴ともとれる家族の話をしながら、外科部長はモニターを見つめてカルテに書き込む。

オレの様子を観察しながら・・・

「ずっと濡れタオルで冷やしたからね、顔の腫れはスグに落ち着くでしょう。」

これからも、濡れタオルで。氷嚢で冷やさないように」

「ハイ」

「なにか不便な事はないかな？」

「いまのところは・・・」

「うん、安定しているから心配はないよ、とにかく安静にしていなさい」

「ハイ・・・先生・・・あの・・・」

「なんだい？」

「あの、時間があつたら、また来てくれますか・・・」

「ああ、そのつもりだよ。じゃあ、また後で」

心地よく響く低い声に安心しながら、彼の後姿を目で追った。

父親とさほど変わらない年齢の男性の暖かな瞳に見つめられると、胸の奥に、これまで感じたことの無い、暖かな気持ちが生まれる事に気が付く。

ずっと何年も感じたことの無かった感覚に戸惑いながら、オレはその気持ちを失いたくなかった。

目の前で、両親が亡くなって以来・・・容易に他人に開かれる事の無くなった心は頑なまま。

全てを斜に見て、孤独を肌感じていた。

都築の家に引き取られても、彼らの気持ちは同情、哀れみ・・・オレには不快な情けでしかなかった。

そして、幼かったオレがその中で身に付けたもの・・・それが己を

装うこと、若いあの医師のようにある意味、自分の姿を偽る事だった。

本当の自分はこんななのに、都築の家の中でのオレは、可愛いキレイなキレイなお人形さんなんだ。

タカ兄の助けが無かったら、高校に入って一人で暮らす事なんて出来なかったに違いない。

あのまま、アノ家の中で人形のような自分を演じているなんて、ほぼ限界。

こうやって自分を取り戻すような真似を、この1年ばかりの間に繰り返してきた。

キツカケをくれたのは、中2の時に出逢った男。

少しの間付き合ったその男に、色々な事を教えてもらった。

男と女のこと、社会のこと・・・そして、オレ自身のことまでも。

別れてしまった今でも、たまに思い出し懐かしく恋しくなるその男が、オレにとって初めての男だった。

ああ、あの人に逢いたいな・・・逢って、抱きしめてもらいたい・・・オレを初めて受け入れてくれた人だから。

誰もが羨んだ、サラリと流れた長い髪をバサリと切り落としたのは、1年前。

本当の自分の姿を探して街を歩いて・・・いろんな友だちが出来た。

・・・そして、

自分の本性を知ったんだ・・・

愛されても、決して愛する事の無い、愛を信じることの出来ない自分の性を。

誰だっていいんだ、ただ、オレの傍に居てくれて愛を囁いてくれる

誰かであれば。

満足に愛の言葉も口にできなくても、その優しいぬくもりに溺れて  
いたいと願う。

## 6（後書き）

こんにちは、洗井あい です。お付き合い頂きありがとうございます。ごさいました。

ムーンライトノベルズ「ユメのつづき」のラストでハルキとリヨウが話していた「ミナミがリヨウを好きなワケ」を急に書きたくなつて、番外編として登場させてしまいました。

「好きなワケ」は未回答のまま、ミナミを助けたシーンを書いただけに？だって、15歳のヤンチャなミナミは、リヨウを「アホ」扱いですからね・・・これが恋に発展するのかいささか疑問が残ります。

少し見えてきたミナミの家庭の事情や、従兄弟のタカ兄が歯科医とかなんとか。

もちろん、ジュン先生はリヨウの真正正銘お兄さんですよ・・・相当な不真面目キャラで作るつもりです。

ミナミをイタぶって病院送りにしてしまいましたが、それでもへこたれないんですから流石ですね。

リヨウと出会う前までの、ミナミの遍歴とでもいいたしうか・・・ハルキとの出会いや関係も気になるし、奇妙な恋愛遍歴も披露してみたいし、番外というか、ミナミの事情を少し書いていこうと思います。

この続は、ムーンライトノベル「ユメのつづき」にて連載予定です。

10月吉日 洗井あい

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2499a/>

---

優しいぬくもり

2010年10月14日07時56分発行